

なく、歴史観はそれぞれのものであるという留保を含めて。歴史を国家が決定するということはあってはならないという原則を含めて。

それに加えて、市民が主体となる、公共の歴史学の新しい構造を伝えていきたい。各イエや個々の人々に伝えられている史料、伝承、記憶はそれぞれの歴史像を結ぶのであり、その主体は市民にある。であるからこそ、被災という状況の中で、まずは命を守り、生活を再建して、そして余裕ができたならイエと個々人の歴史に目を向けてもらいたい。その集積が地域の歴史を守り、継承する。それは国家のレベルにも到達して、「真正性に肉薄した歴史観」を醸成していくであろう。震災後歴史学の獲得してきた公共性は、教育の現場を通じて再生産される可能性に満ちていると信じる。

### 「3.11」－現実・言葉・従属化

箭 内 任

今から10年前、本学紀要第61・62合併号の特集で記したことを、いまここで思い出してみたい。そこでは次のような言葉で短いエッセイを閉じていた。

「出来事を「知（認識）」の領域へと収斂せしめ、それを「わけしり顔」で言うソクラテスを告発したニーチェの姿を、わたしたちはここに知ることになる。ニーチェは古代ギリシアの悲劇に「生」の充溢を認めていたではないか。それは、出来事を訓戒として受けとめ、目指すべきものを見いだそうとする記念碑的なものでもなければ、失われたものへの郷愁を覚えようとする骨董的なものでもない。「負債」という桎梏を引き受け、なおかつそこから解放を願う生のあり方、それをニーチェは喝破していたのではなかったか。

もしかりにわたしたちが、それに気づかぬまま、ただ言葉を恣にしているとすれば、それはまた、わが生の意味さえも救い出せないただ虚しいばかりの悲劇というほかあるまい。」 箭内 任 「「3.11」－語りと記憶と、そして忘却と」『尚綱学院大学紀要』第61・62合併号

#### 事象と現実と

10年がすぎた。

今回、この紀要の特集原稿について、ずいぶん前に執筆依頼があったが、すぐさま書き始めることができなかった。「東日本大震災からの10年、その現実と変容」という企画だから、やはり3月11日の日付をもって書き始めようと思っていたのだが、なかなか言葉が出てこない。周りではその日に集中するかのように「10周年」という言葉が一つの「記号」となり、その言葉によって震災という事象を様々な角度から語り出そうと努めているように見えた。実際にそうだったのだろう。しかし正直なところその語らいの中のひとりになることに些かのためらいを感じたのだ。

哲学が歴史の現実を表象しようとするとき、その現実はすでに歴史の過程においてはすでに

形作られてしまっており、哲学的な概念が教えるものとは、必然的に歴史の現実である。このことをヘーゲルは「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」と語ったのだった。彼がさらに述べた「ミネルヴァの梟は黄昏に飛び立つ」という言葉は、哲学が事実を後追いし、それを解釈するということを意味しているのではなく、歴史的事象やそれについて語られてきた言葉そのものの現実、事象を事象たらしめ、言葉を言葉たらしめようとする精神の自己展開であり、まさに人の「生」を意味していた。とはいえ、自分はこの「東日本大震災」という歴史的な事象についていまだに総括しきれていないし、それを語る言葉さえも持ち合わせてはいないと思えたのだ。

だからこれまでの間、様々な分野から（それは学問の領域だけにとどまるものではなかったが）語り出されている言葉を目にし耳にするにつけ、そして自分が置かれていたこの年月や立場を考えて、それを語る術を持たない自分に対してそのたびに焦燥感にかられてきた。今なおこの事象について語る言葉を見つけられずにいる自分からすれば、世間の人々がすんなりと何かしら腑に落ちた感じでそれについて語り出す様子を目の当たりにすると、正直なところ妬ましくも思ってしまう。その意味では、自分にとって「3.11」はいまだに「現実」たりえないということになるのだろうか。

## 「喪」と言葉

しかし、この10年、語られてきた言葉とはなんだっただろう。10年という時間は誰にとっても等しい時間ではなかったということだけは確かだろう。ある者にとっては長くもあれば、またある者にとっては短くもある。震災10年という区切れもまた、誰もがそれを意識するほどははっきりとしたものではなく、ただ人に共通した時間の経過を意識させるにすぎない。

ある者にとっては、10年前のあの日から逃れられないまま今を生きているかもしれないし、またある者にとっては、「幸い」にも忘却の彼方にそれを追いやっているかもしれない。それを考えれば、この事象はたしかに「喪の作業」であるにせよ、10年という数字や言葉にこだわる必要はないのかもしれない。私の10年は、あなたの10年でもなければ彼の者の10年でもない。そこには誰かに還元することのない一人ひとりの「喪の作業」があったはずなのだ。

だが、この国では「喪の作業」を一人ひとりどのように行ないえたのだろうか。それは一人ひとり固有のものだったのだろうか。それとも、何かしら平均化し平準化する作業といったものだったのだろうか。あるいは、あえてそれをしないという力が働いて、しないことを選んだのだろうか。

この10年間、一人ひとりが取り組んできたこの作業とは、じつはそれをとおして自分や周りの人々を、そして世の中のあり方を問い直すという直接で単純な作業のように見えた。震災の軽重を問わず誰もがそれに向かい合うことになったのであり、言い換えれば、それは震災を通しての「自分語り」でもあったのだ。

煩わしいくらいに耳にした「寄り添う」という言葉も「絆」という言葉も、「震災」や「被災」という「物語」を語るうえで必要とされる言葉のひとつだったのだろう。しかし、その物語が「自分語り」である以上、それは自らを作り出す物語でもあったはずだ。言葉をかえれば、この10年前の事象をとおして自らの周りに散りばめられた言葉の一つひとつが、それぞれ一人ひとりのあり方を自分たらしめ、自らの「主体」を構築してきたのだった。つまり、その数々の言葉によって誰もが知らず識らずのうちに、自らが何であるのか、そしてどのようにあるべ

きなのかということを経験的な言葉や言説による物語の中で「現実」化させてきたのである。

そのような言葉によってのみ、もし私たちの共同体の結びつきが保証されていたとすれば、裏を返せばそれ以外の言葉で別のあり方があったかもしれないにもかかわらず、それを閉ざしてしまったのかもしれない。もしかしたら、私たち一人ひとは、その言葉を離れ拘束されずに生きられたかもしれないし、周りの人々とはまた別の異なった言葉によって結ばれることも願うことができたのかもしれない。だが、今ここにいる誰もが意識せぬまま染み付いた言葉によってのみ共同体で生きていく自らを安堵させ、それ以外の私たちの願いを無意識のうちに否定してしまったのかもしれない。世の中に広く行きわたった言葉で自らが漂流しないように自らを繋ぎとめ、そこに錨をおろそうとしてきたのでは、という思いが頭をよぎる。被災地はどこか、被災者は誰か、避難した者、残留した者、そのような言葉はそもそも概念的な差異を生じさせるものでもあるにもかかわらず、その差異に一人ひとは目を瞑っている。自分をその言葉に馴染ませることで安住させようとし、進んで自らを言葉の囚われ人になろうとしてきたのではないのか。

### 主体化という従属化

言葉というものは一義的な意味に還元されるものではないし、そのようなことは誰もが知っていることではあろうが、この10年、どうもすっきりとしない気持ちであり続けた。この心のありようは、一人ひとりの心のありようを映す言葉が何かその者ではない誰かによって奪われてしまっている、それでいてそれに自らを安住させようとしている、そんな気持ちであった。さらに言えば、その安住しようとする一人ひとは、心のあり様を篡奪されてしまっているとは気づかずに、主体的であろうとしてむしろ積極的に肯定的に受容し、あまつさえ能動的に作り上げようとしているのではないのかといったものだった。

それだけにはとどまらず、あの事象以降、私たちは数々の欺瞞の言葉を知ってしまった。たとえば、この国のあるイベント誘致のために時の首相が発した言葉は、実情を蔑ろにしたまやかしの言葉であったが、それがいつしか呪文の如く唱えられると、それはこの国の隅々に至るまで浸潤してしまった。まやかしの言葉によるポリテイクスは、従来の構造を全て否定し尽くし、それにとって代わって優越的な権能を有したと誤解した者たちが喧伝するまた別のまやかしの言葉を次から次へと生み出す。それによって、この国に住むあらゆる人々をそのようなありふれた陳腐な、それでいて人々の批判をうまく掻い潜るような言葉で、別の言葉で語ることもできたであろうとする術を剥ぎ取ってしまい蹂躪してしまった。現実の政治の軽はずみな言葉が一つのメタファーとしてこの国全体を覆い尽くしてしまったのだ。

その者たちは単一の言葉にしがみつき、それ以外の言葉を持たず、あるいはそれに背を向け見向きもせず、驕り高ぶり言葉を人々に投げかける。その者たちは卑しい心ばかりか疚しい良心にさえ気づこうとしない。

この10年、私たちは他者の言葉に怯え、他者の言葉に自らが篡奪されてしか生きていけない自分を生きていることを気づいてはいたはずなのだ。

私たちの主体化は他者による従属化であり、それは意識されずに無意識のまま、しかしそれでいて積極的になされていると理解して、主体化 (subjection) はすなわち従属化 (subjection) であるとしたジュディス・バトラーは、その意味では正しいと思う。彼女はヘーゲルの主奴論という弁証法からこの意味を引き出したのだ。これは、この10年で語られてきたあらゆる言

葉は、私たち一人ひとりの主体化がじつは自らを従属させようとするものであるということに、そしてここで言えば、震災を語る私たち一人ひとりが自らの経験を語る時には必ず他者による従属化を受けている主体としてしか語り得ない事実があるということに気づかせるものだ。

### 東日本大震災からの10年、その現実と変容—回帰する10年

震災から10年。ここまで書いてきても自分の言葉は散らかってしまい、そこに布置関係を見出せないでいるのだが、最後になんとかまとまりを見つけてみよう。

ヘーゲルの言葉が意味していたのは、思想が持つ言葉は決してアドホックになされるものではなく、たえず現実を映し出すものであるというものだったし、この10年で言えば、「喪の作業」とおして語る言葉が自己の現実そのものを表象し続けてきたということであった。しかし、その現実を語り出す自己は、断じて無色透明な社会でもなければ、自らの存在が誰に対しても等価であることがはじめから担保されている社会でもないところに置かれている。

一人ひとりが「負債」という桎梏を引き受け続け、なおかつそこからの解放を願いつづけていること、そしてその一人ひとりの生のあり方を「時」とともに見つめ確かめること、これが、東日本大震災からの10年の現実であり、またその変容であったということだろうか。

## 浪江と双葉へ行って考えたこと

東 義 也

### 浜通り出身の卒業生たち

震災前、浪江町から毎日尚綱に通学していた学生がいた。双葉高校出身だった。その頃東ゼミでは毎週戶外遊びをしていて、彼女のえんじ色のジャージが印象的だった。

また、下の学年に南相馬から通学する学生が二人いた。私がクラス担任になった。親しくなると目を輝かせて地元の話をしだした。「先生、一度相馬野馬追を見に来てください。」

その後、3人とも地域の保育施設に就職した。そして、2011年3月11日、東日本大震災が起き、翌日福島第一原子力発電所の大事故が起きた。放射能汚染の影響で3人の就職した園はみな閉鎖された。二人は県外へ脱出、一人は町ごと避難した先で公務員保育士から市長秘書になった。仙台で再会した時、防護服を着て一時帰宅した自宅で自撮りした写真を見せてくれた。痛々しかった。

あれから10年、それぞれ結婚しそれぞれの場所で子育てをしているようだ。

### 10年前のまま

震災前、保育・教育実習の巡回指導で何回か福島の浜通りを通ったことがある。どの保育施設へ行っても子どもたちの賑やかな声が響いていた。また、いわき市まで日帰りして浜通りの高校を巡回訪問したこともあった。反応は今ひとつだったが、えんじ色のジャージで球技大会を楽しむ高校生たちの歓声を今でも思い出す。田舎の長閑な風景が記憶に残っている。まさか海沿いに原子力発電所があるなどはその時は知らなかった。